

# 崇城大生 市民学会の撮影パネル

崇城大芸術学部（熊本市西区）の3年生が、10日に始まる第19回ハンセン病市民学会の撮影ブースのパネルを制作した。総会・交流集会有る同市中央区の熊本県立劇場ホワイエ（ロビー）に設置する。学生たちは「ハンセン病問題の歴史を知りきっかけになってほしい」と話している。

同学会は差別や偏見の解消につなげようと2005年、熊本で発足。毎年5月、全国の療養所所在地などで集会を開いている。

偏見を恐れる元患者や家族に配慮し、会場での写真や動画撮影は禁止される。代わりに周囲が映り込まない撮影ブースを設け、その背景となるパネルの制作を学会実行委員会が崇城大に依頼した。

制作したのは、デザイン学科の奥田直辰准教授ゼミの7人。2・4層四方のパネルをジグソーパズルに見立て、来場者がハート形をした紙製のピース1枚をはめるようにした。一般の人にはハンセン病問題を正しく理解し、元患者たちには心の「空白」を埋めてもらいたいとの思いを込めた。

パネルの色は合志市の国立ハンセン病療養所・菊池恵楓園の人所者でつくる絵画クラブ「金陽会」の金色をイメージし、黄色とオレンジが基調。2色は「生命の輝き」が花言葉のマリーゴールドの色で、「差別や偏見に苦しむ患者や家族が、これからは輝く人生を歩んでほしい」と中心的に制作した平野加子さん。

来場者が花畑を作り上げる仕掛けとして、花の形をした紙にメッセージを書いて貼るボードも制作した。学生の田中美羽さんは「来場者が温かな気持ちになってほしい」と笑顔で話している。

（草野太一）



▶パネルの制作に取り組みゼミ生ら 4月22日

▲完成したパネルとともに笑顔で写真に納まる崇城大芸術学部の奥田直辰准教授（中央）ゼミの3年生ら 2日、熊本市西区

## ハンセン病 知るきっかけに